The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	金鶴泳文学の変遷 : 吃音から民族へ
Author(s)	李, 丞鎭
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58550
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	李（イ）　丞（スン）　鎭（ジン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　24153　号
学位授与年月日	平成22年9月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	金鶴泳文学の変遷　―吃音から民族へ―
論　文　審　査　委　員	（主査） 准教授　橋本　順光 （副査） 教　授　出原　隆俊　　言語文化研究科教授　中　　直一

論文内容の要旨

本論文は、在日二世作家金鶴泳の小説において吃音、父親、女性、民族といった主題が、どのように描かれ、変容してきたのか、全作品にわたって考察したものである。

第一章では、金鶴泳の第一作『凍える口』（1966）と、三年後書かれた『まなざしの壁』（1969）における吃音の描写に注目し、その変容を指摘する。金鶴泳は『凍える口』を執筆することで、自身の吃音から解放されるが、そのことにより、次作『緩衝溶液』（1967）や次々作『遊離層』（1968）にみられるように民族という問題が前景化したと位置づけられる。そして、1969年の『弾性限界』では自分の父を、『まなざしの壁』（1969）では金嬉老事件を題材にして、在日としての「私」を鮮明に描き出すことになるとされる。

第二章では、金鶴泳作品における父親の主題が考察される。金鶴泳における凶暴な父は、『凍える口』以後、一旦姿を消すが、『まなざしの壁』以降、再登場する。次作『錯迷』（1971）では、『凍える口』での逸話が反復されてはいるものの、父の弱さの発見が和解の糸口となっていることが注記される。そして『軒灯のない家』（1973）での自己の内なる「父」の発見を経て、『鑿』（1978）における父が、同じ逸話を語りながらも、「和解」へと至る変化を示していると述べられる。

第三章では、金鶴泳作品における女性の主題が扱われる。作品のなかでは、おおむね対峙すべき横暴な父親に隠れて、母の影は薄く、それは『軒灯のない家』や『剥離』（1978）における妻の描写とも通底していることが論じられる。そうした類型性は、金鶴泳の初期作品における恋人の造形とも連続しているが、中期から後期にかけて、自ら言葉を発する女性が登場し、その先駆性が指摘される。

第四章では、金鶴泳における民族を考察する。政治意識と民族意識が等しく考えられていた状況のなか、その正体を見つけることも、その模索を諦めることもできずに、主人公に不安や焦燥をもたらす存在として「民族」を描いた特性が指摘される。それは、後の三世作家に描かれた「祖国」と共通しており、金鶴泳作品が、こうした民族についての描写においても先駆的であることが、再評価される。

論文審査の結果の要旨

金鶴泳の小説は、これまで吃音や民族意識という個別の観点から評論されてきた傾向があり、したがって、初期から後期にわたって全作品を論じようとした本論文の試みは高く評価できる。また、いわゆる在日一世から三世作家までの小説にも幅広く目配りしながら、共通する主題とその差異を約200ページ（400字換算約600枚）にわたって粘り強く論じており、たとえば第一章が韓国の査読付き学会誌に掲載されていることが示すように、博士論文としての基準は十分に満たしているといえるだろう。

しかしながら、先行研究について十分な参照や対照がなされていない点、そして、作品から論証となる引用が不十分なままに、作品の判断や批評がなされている点については、複数の点から指摘があった。作品分析においても、私小説的な作品に作者自身を重ねすぎるあまり、本文そのものを精緻に読み解く作業がおろそかになっている箇所がいくつか指摘された。

比較研究と批評理論の二点について、不満が寄せられたことも付け加えなければならないだろう。第一に、父との対立と和解という主題において、志賀直哉の諸作品との関連は無視できないが、そのことは注でも触れられているのみで、十分な比較はなされていない。また、吃音という主題でも、話形の点でも、三島由紀夫の『金閣寺』との比較が可能であるにもかかわらず、それら魅力的な主題は論じられていない。第二に、批評理論と、特にポストコロニアル批評と、多くの問題や関心を共有し、すでにその観点からの研究も刊行されてはいるが、それらの文献は十分に援用されていない。

とはいうものの、これらの不満はいわば要望であり、こうした金鶴泳作品の比較文学的な研究の可能性が、むしろ本論文によって示され、展開されようとしているというべきだろう。上記した先行研究の位置づけと本文分析の不徹底にしても、論文全体の価値を損なうものではけっしてなく、今後、さまざまな先行作品や批評理論などを参照することによって、いっそう本格的な比較文学研究が生まれることに、審査員一同一致して期待が寄せられた。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい十分な価値を有するものと認定する。